



Title	第7章 コレクティブハウジング居住における子どもの育ち : コレクティブハウス秋桜を事例として
Author(s)	稲見, 直子
Citation	フェミニズム・ジェンダー研究の挑戦 : オルタナティブな社会の構想. 2022, p. 86-98
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88601
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

コレクティブハウジング居住における子どもの育ち
——コレクティブハウス秋桜を事例として——

稲見直子

(神戸松蔭女子学院大学人間科学部都市生活学科専任講師)

第7章 コレクティブハウジング居住における子どもの育ち ——コレクティブハウス秋桜を事例として——

稲見直子

1. はじめに

子どもの育ちをいかにして支えるか。近年、社会性や自立心に課題を抱える子どもが増加しているとして、「子どもの育ち」をめぐる政策的関心が高まりを見せている（家庭教育支援の推進に関する検討委員会 2012: 4）。2006年に改定された教育基本法第10条では、子どもの生活習慣や自立心などを身につけさせる「第一義的責任」者として「父母その他の保護者」を位置づけ、「家庭教育」の重要性が明記された。子どもの健全な成育を保障していこうということ自体に異論の余地はない。しかし、このように家庭に期待や要請を行うだけでは、共働き家庭の増加や地域社会の衰退が進展する現在、親へのより一層の負担、過剰な期待がかかることが懸念されるばかりか（本田 2008）、主に親のみが養育する環境下において社会性や自立心を育むという意味での子どもの育ちを考える上で果たして健全と言えるのだろうか。

子どもの育ちを考えるにあたって、社会学では子どもの社会化研究において蓄積がある。社会化とは、「人が自分の所属する社会や集団、これから所属しようと思う社会や集団に共通するスタイルを学習すること」で、「そのスタイルには、規範、価値観、ものの見方や考え方、行動パターンなどさまざまなものがある」（工藤 2007: 196）。特に、子ども期の社会化は「個人の基本的な部分や人格の芽生える時期に関係し」、この「プロセスで獲得された知識や文化的規範、慣習についての知識や理解は、背景として根強く残」（Coffey 2006: 165=2021: 188）るとされている。

家族社会学においても、子どもの社会化は主要なテーマである（和泉 2013: 185）。T. パーソンズに代表されるように、子どもの社会化は「家族のもっとも重要な機能」（Parsons and Bales 1956=2006: 1-2）とされ、日本においてもパーソンズの構造機能主義の理論をベースにした子どもの社会化研究が蓄積されてきた（佐藤 1970）。しかし、ここで前提とされている家族は核家族である。そのため、社会化の担い手が親しか想定されていないばかりか、子どもは親から一方的に社会化される客体としてしかみなされていない。つまり、家族社会学の子どもの社会化論においても、「家庭教育」の考え方が前提とする家族像同様、親を子どもの社会化の担い手の第一義的責任者、子どもを親から教育されるだけの存在と位置付け、子ども自らが社会性や自立心を身に付けていく育ちの側面をとらえる視点が不十分だったと言える。

そこで本稿は、子どもの育ちを考える題材として、「コレクティブハウジング（以下「コレクティブ」と略称）」と呼ばれる住まい方における暮らしを取り上げたい。詳しくは後述するが、コレクティブとは、個別の住戸群と共用空間を併せ持つ集合住宅で、共用空間や生活の一部を居住者間で協同化する暮らし方のことをいう。コレクティブでは、子どもたちは親以外の他者とも日常的に関わりを持ちながら暮らし、親からの強い保護や監督からある程度緩和されるため、親から一方的に社会化されるだけの子どもとは異なった育ちがみられるのではないかと考える。そこで本稿では、コレクティブ居住において、子どもが親以外の他者とも共住する環境下でいかにして育つのかを考える。

尚、コレクティブにおける子どもの育ちに関する先行研究としては櫻井らの研究がある。そこではスウェーデンと日本のコレクティブを調査し、子どもが多様な人々と関わることで対人関係力が育まれることが認められているが（櫻井ほか 2012）、具体的に子どもたちが家族以外の居住者とのように関わりながら暮らしているのか、さらにそのことが子どもの育ちにおいてどのような意味を持つのかまでは考察されていない。

コレクティブにおける子どもの育ちを考えることは、次の2点において意味を持つ。1つは、親から子への強い庇護・

監督を前提にした家族のあり方を問い直すことである。日本では高度経済成長期、家族成員間の強い情緒的な結びつきを特徴とする近代家族が大衆化した（落合 2019）。特に性別役割分業が根強い日本社会では、子どもへの強い愛情の下、母親が子どもを物心両面において世話することが自身のアイデンティティにもつながり子離れを難しくさせている一方、子どももまたそれを当然のこととして受け入れるようになっている。しかしこのことは子どもの脱青年期を引き延ばしている一因ともされている¹⁾（宮本ほか 1998）。コレクティブという、家族生活を営む居住の場において他者が共住する住まい方は、そうした親子の過剰なまでのつながりを緩和する家族の可能性を提示し、結果として子どもの育ちを考えることにもつながると考える。

もう1つは、従来の家族単位での居住のあり方を再考することである。戦後日本の住宅政策は「一世帯一住宅」を掲げ、核家族を対象とした持ち家政策を推進し、その結果、多くの中流家庭が「マイホーム」を手に入れた（平山 2020）。かつては家の中に女中や甥姪などの親族が同居したり、「客間」といった住まいにおいて他者と関わる空間が存在していたが（落合 2019）、プライバシーを重視する家族単位のマイホームでは外部に対して排他性を強め、子どもにおいては個室まで完備されるようになり、住まいにおいて子どもは親以外の他者と関わることなく人間関係において家族内で自己完結するようになった（西川 2004）。しかし、子どもも親以外の他者と持続的な関わりが促進されるコレクティブという住まい方においては、家族のプライバシーは守られながらも、子どもが親だけではない多様な人間関係を築くことができる新たな住まい方の可能性を提示できると考える。

2. コレクティブとは何か

コレクティブの特徴は、住居形態と居住様式に分けられる。住居形態は、個別の住戸群と複数の共用空間が組み合わさった集合住宅である。個々の住戸にはキッチン、浴室、トイレが完備され一つの独立した住戸となっている。類似した住居としてシェア²⁾があるが、シェアの場合、個室は確保されているものの、キッチン・浴室・トイレは共用となるため（久保田 2009: 35）、シェアよりもコレクティブの方が各住戸のプライバシーが守られる度合いが高い。またコレクティブの住戸はワンルームや1LDK、2LDKなど間取りにバリエーションがあり、家族やカップルでも入居がしやすいため、同年代の単身者を中心とするシェアと比べ、世帯規模や世代において幅を有しやすい。また、共用空間の代表的なものには大型のキッチンやダイニング、リビングを備えたコモンスペースがある。他にもランドリーや菜園など住宅によって共用空間の数や内容は異なる。これらの共用空間は、居住者であれば「個々の住宅の延長」（小谷部 1997: 13）としていつでも自由に使うことができる。なお、一般的にコレクティブの共用空間は各住戸の基準面積を10～15%縮小することで生み出されているため、各住戸は標準の広さよりも少し狭い設計となっている（小谷部 1997: 13）。

居住様式としては、日本のコレクティブの場合、主に自主運営という仕組みが取り入れられている³⁾。自主運営とは、共用空間をはじめとする住宅の運営内容や方法を、居住者組合での「話し合い」を通じて意思決定し、その活動自体も同組合で担っていくというものである。コレクティブでは入居時に大人は居住者組合に入ることが義務付けられている。その際、夫か妻いずれかが加入すればよいという世帯単位での加入ではなく、夫も妻も個人単位で加入することが原則である。居住者組合は複数の係やグループ活動で構成され、居住者は係・グループ活動に複数参加することが求められる。係・グループの仕事は、それぞれが担当する領域において当番の仕組みを考えたり、必要な備品を準備したりするマネジメントが中心で、作業自体は居住者全員に割り振られる。例えば、イベントグループであれば、イベントの日程調整や備品の購入や役割決めなどは当グループが行うが、事前の準備や当日の運営は居住者全員で分担して行う。係・グループによる相談や提案は議題として月に1回開かれる定例会で話し合わせ、居住者全員の合意を基に方向性やルールが決められる。ただし、そこで決まった事柄はあくまでも暫定的なもので、居住者の身体状況等に応じて適宜見直しが行われる（稲見 2020）。

3. 調査概要

本稿で取り上げる住宅は「コレクティブハウス秋桜（以下「秋桜」と略称）（仮称）」である⁴⁾。2009年4月にオープンした秋桜は、関東を中心にコレクティブの事業を専門に展開する「NPO コレクティブハウジング社（以下、当NPOの略称に従って「CHC」と略称）」⁵⁾と個人事業主による共同事業として設立された。東京都郊外に位置する秋桜は最寄りの駅まで徒歩7～8分、そこから都心までは特急で25分と通勤に便利で、駅周辺にはスーパーや銀行、郵便局があり、働きながら子育てをする家族にとっては利便性の良い環境である。

秋桜の建物は、20の住戸群と複数の共用空間からなる。住戸のタイプは、2戸でキッチン・トイレを共有するシェアタイプが4戸（計8戸）、1ルームが6戸、1LDKが4戸、2LDKが2戸であり⁶⁾、全て賃貸である。共用空間には、大型キッチンとダイニングを備えたコモンスペース（以下「コモン」と略称）（72㎡）にくわえて、和室やウッドデッキや菜園などがある。本研究で秋桜を選んだ理由は、子育て世帯が多数入居する住宅としてCHCから紹介して頂いたからである。

2021年12月1日現在、秋桜には35名の人々が暮らしている。年齢は0歳から70歳代と多世代にわたる。世帯数は全部で21世帯で、そのうち19歳以下の子どもがいる核家族世帯が6世帯、夫婦世帯が1世帯、単身世帯が10世帯（そのうち65歳以上が3世帯）と、世帯構成と規模には幅がある。

本稿の分析で用いるデータは次の2つである。1つは観察データである。観察では、秋桜の活動の様子や日常の様子、居住者同士のやりとりなどをフィールドノートとしてまとめた。調査期間は2016年1月～2017年3月、2018年3月～2021年12月までである⁷⁾。フィールドノートからの引用は（年/月/日）と表記する。

もう一つは夫婦5組（夫と妻それぞれ個別に実施したため合計10名分）を対象に行った半構造化インタビューのデータである。調査期間は2016年1月～2021年8月までで、2名は4回、6名は2回、2名は1回実施した。また、Af・Amさん夫妻の子どもAcくんにも2021年9月にインタビューを実施した⁸⁾。

表1は対象者の概要である。5家族の共通点として、(1)年齢は30～50歳代である、(2)19歳以下の子どもがいる、(3)夫婦共働き（非常勤含む）である、の3点である。尚、Ef・Emさん家族は住居が手狭になったため2021年3月に退去した。

2021年12月1日現在、秋桜に暮らす子どもは全部で11名である（Bc1くんは現在学生寮で暮らしているため同居していない）。そのうち、親と一緒に秋桜に入居した子どもは5名（Ac、Bc1、Dc1、他2名）、秋桜入居後に誕生した子どもは6名（Bc2、Bc3、Cc1、Cc2、Cc3、Dc2）である⁹⁾。

対象者の表記については、○fは父親（father）、○mは母親（mother）、○cは子ども（child）を意味し、各家族の子どもにきょうだいがいる場合はアルファベットの横に年齢が高い順に番号を付した。次節以降の議論でもこの表記を用いる。尚、本文では子どもが女の子の場合は「ちゃん」、男の子の場合は「くん」を付すが、インタビューの引用内において親が男の子であっても「ちゃん」と呼んでいる場合はそのまま「ちゃん」を用いる。

表1 インタビュー対象者のプロフィール（2021年12月1日時点）

対象者	年齢	子ども（年齢）	就労状況	入居時期
Af	50代	Ac (16)	常勤	2009年4月～現在
Am	40代		常勤	
Bf	40代	Bc1 (19)、Bc2 (11)、Bc3 (9)	常勤	2009年5月～現在
Bm	40代		常勤	
Cf	40代	Cc1 (9)、Cc2 (7)、Cc3 (5)	常勤	2010年9月～現在
Cm	30代		常勤	
Df	30代		Dc1 (6)、Dc2 (1)	
Dm	40代	非常勤		
Ef	30代	Ec1 (6)、Ec2 (1)	常勤	2018年4月～2021年3月
Em	30代		常勤	

では各家族が秋桜への入居に至った経緯について確認しておこう。まず今回の調査では、夫婦のうち入居を切り出したのは夫からが3組 (Af, Cf, Df)、妻からが2組 (Bm, Em) となっている¹⁰⁾。きっかけはそれぞれが位置するライフ・ステージによって異なるが (例えば、結婚や子どもの誕生や子どもの小学校入学など)、主な理由をコレクティブの暮らし方との関連で言えば、次の2つに分けられる。1つは、社会関係的理由である。例えば、子どもにとって近隣との適度な関わりが必要だと考えた (Af)、居住者同士で助け合う暮らし方に魅力を感じた (Cf, Em)、色々な人と関わって面白そうだった (Df)、自分自身だけでなく夫ないしは妻にも様々な人とつながりを持ってもらい刺激を受けてほしかった (Df, Em) などである。もう1つは経済的理由である。これは、居住空間や生活用品などを居住者間でシェアするメリットが挙げられる (Bm, Em)。尚、各自の理由は1つだけというわけではなく、複数にわたって重複している。

妻もしくは夫による入居の提案に対するパートナーからの反応は各夫婦によって異なる。例えば、秋桜を見学した際に多世代で物事を決めていく様子を見て興味を持ちすぐに同意に至ったケース (Am, Bf) もあれば、自身も職場以外の人とつながることの重要性を認識し特に異論を出すことはなかったといったケース (Ef) もある。Dmさんのように、家族以外の他者と暮らすことに抵抗があり当初は反対していたものの、実際に住宅を見学する中で自然が多い環境や居住者の親切な対応に好感を持ち、最終的に入居を了承したといったケースもあった。さらにCmさんのように、コレクティブのことがあまりよくわからないまま、夫の意向に沿って入居したという人もいる。

こうしてみると、対象者がコレクティブを選んだ理由として、Afさん以外は必ずしも子どもが育つ環境を優先的に考えていたわけではなく、親自身の育児環境やパートナーの人間関係のあり方など様々な要因を考慮して入居してきたことがわかる。

4. 秋桜における子どもたちの日常

秋桜における子どもの育ちを考えるにあたって、まずは子どもたちが他の居住者とのような関わり合いを持ちながら暮らしているのかをみていく。

4.1 子ども同士の関わり

秋桜がオープンした当初、親と一緒に入居した子どもは全部で7名いた。当時の子どもたちの様子について、Bfさんは「毎日が修学旅行みたいな感じ」だったと話す。同様の語りはAfさんからも聞かれた。

普通って夕方バイバイして、家でちょっとクールダウンして、ご飯食べたり、お風呂入ったり、家族でクールダウンして寝る時間を迎えるじゃないですか。こことかって、(中略) コモンミールで会うとまた友だちと一緒に。そこからさらに、さらにテンション上がっちゃうわけですよ。ギャーギャーなんですよ。毎日ギャーギャー、すごいんですよ。楽しくてしょうがない、子どもたちは。あっちこっちで遊んで、大変なんですよ。

コレクティブの代表的な協同活動の一つにコモンミールがある。コモンミールとは、当番制の夕食づくりのことで、当番になった居住者はコモンのキッチンを使って希望者分の夕食を作る。秋桜では週末を中心に週に2～4回ほどコモンミールが実施されており、大人1人400円、子ども1人200円で食べることができる。

今回調査対象とした家族はいずれも共働き家族であるため、安価でかつ、仕事から帰宅後すぐに食べられる手作りの夕食は、家事の負担が軽減できるとてもありがたいものとして受け止められていた。したがって、すべての家族がほぼ毎回食事を注文し、子どもたちと一緒にコモンのダイニングで食事をとる。これは、子どもたちにとっては、保育園や学校から帰宅後も友だちと会える絶好の機会となる。

夕食が終わると子どもたちはたちまち一緒に遊び始める。遊び場所としては屋内の共用空間が好まれる。その理由

として、そもそも各々の住戸自体が物理的に狭いといった事情があるほか、秋桜では一般のマンションのように共用の廊下が屋外ではなく屋内にあり、天候や時間帯を気にせず住宅内を安全に移動することができるからである。子どもたちは建物を縦横無尽に走り回り、共用空間のいたるところで遊びが繰り広げられる。コモんで一緒にゲームをしたり動画を観たりすることもあれば、和室でレゴや電車のおもちゃで遊ぶこともある（Dfさん）。遊び相手は、同じ年同士の時もあるが、年齢に関係なく保育園児から小学生や中学生までと一緒に遊ぶこともある。

コモンミール以外にも、秋桜では休みの日になると、共用空間を活用して様々なイベントが開催される。屋上での花見会、屋外駐車場で流しそうめん大会、コモんでのクリスマス会など、これらのイベントには家族ぐるみで参加することも多く、子どもたちは楽しんで参加している。

もちろん、ミールやイベントがない日でも普段から子ども同士でよく遊んでいる。例えばDc1くんとEc1くんは同じ年だったこともあり、常に一緒に遊んでいた。Emさんは2人の普段の遊ぶ様子について次のように話す。

彼らが好きだったのはハウスの周りを流れてる小っちゃい小川があるんですけど、そこを秘密基地って言って忍者の格好をしてそこを走り回ったりして。あとは駐車場の下で自転車乗ったりして駐車場のとこでブラブラして。あと屋上行って水出して遊んだり。

2人は別々の保育園に通っていたが、秋桜にいる時は「お互い家に行き来しまくりって感じで、（中略）[Ef・Emさんが] 家族で出かけるときでも、Ec1ちゃんが、お出かけよりもDc1と遊びたいって言ったら、Ec1ちゃんだけ残って遊ぶこと」（Dmさん）もしょっちゅうだったという。（[]内は筆者補足。以下同様。）

4.2 子どもと大人との関わり

子どもたちが日常的に関わっている相手は大人たちも含まれる。特に週末の夜は、コモんで子どもと大人と一緒に遊ぶ様子がよくみられた。例えばCmさんは次のように話す。

昨日も結構夜まあ遅くちょっと出かけて帰ってきて、（中略）コモんに明かりがついてたから、[Cc1ちゃんが] ちょっと誰かいるから行こうよって言ってきて、（略）Fさん（女性・40歳代）とかGさん（女性・40歳代）とかAmさんとかとみんなで遊んでくれたりとかして、よく遊んでくれたりするんですよね。

主に週末に開催されるコモンミールでは、平日は仕事で忙しい大人たちも食後そのまま夜遅くまでコモんで談笑するなどして過ごすことが多く、子どもたちもそのことをよく知っている。子どもたちはコモんにカードゲームやボードゲームを持ってきて大人たちをつかまえ、やがて「大人の方がむきになっ」てしまうほど、「子どもも大人も一緒に遊」んでいるとAmさんは話す。こうして、秋桜ではコモンを介して自然と子どもと大人との関わり合いが生まれる。

気心知れた大人については、部屋まで遊びに行くこともある。鳥や猫などのペットを観に行くこともあれば、お菓子をもらいに行ったり、テレビを一緒に観て過ごすこともある（Dfさん）。中には、翌日まで泊めてもらう子どももいる。例えば、Acくんは小学生の頃、Hさん（男性・50歳代）の自宅にたびたび泊めてもらうことがあった。2人の関係についてAfさんは次のように話す。

最初の頃からだから、長く一緒に暮らしているということもあるし、彼にとっては楽なのかな。Hさん、学校の先生だということもあるかもしれないけど、[子どもの] 扱いも上手いし、性格的にもあんまり細かいことごちゃごちゃごちゃ言わないし、楽しい人だし、だから[Acくんも] たぶん好きというか、気が合うんじゃないかな。

Acくん同様、Hさんも秋桜オープン時から入居しており、Acくんとはかれこれ10年以上の付き合いになる。Acくんは、Hさんがコモンミール担当の日には一緒に調理を手伝ったり（Afさん）、学校の宿題がわからない時は教えてもらう（2019/8/24）など、Hさんのことをとても慕っている様子がみてとれた。AmさんもAcくんは「居住年数が長く（中略）[他の居住者を]よく見てるといふか、遊んでくれる人をよく知っている」と話す。このように、秋桜では長年にわたって子どもも大人も居住を通じて日常的に関わりながら生活してきたことで、互いのことを深く知ることができた。こうして築かれてきた信頼関係があったからこそ、子どもも安心して他者の家に遊びに行ったり、泊りに行ったりでき、親もまた安心して子どもを預けることが可能になったと言える。

4.3 子どもと大人のコンフリクト

居住空間や生活の一部を協同化するというコレクティブの暮らし方は、居住を通じて子ども同士のみならず、子どもと大人との関わり合いも促してきた。しかしこのことが、子どもと大人の間でコンフリクトを生み出すこともある。

最もよく聞かれたのは、大人から子どもに対する共用空間の使い方に関するクレームである。それには、コモンミールの時の騒ぎ声や和室でのおもちゃの出しっぱなし、共用廊下を走り回るなどの問題が挙げられる。これらは「こじれるってわけでもないんですけど、ずっとわかり合おうってことでもないっていふか、しかも何が正しいとかでもなく、（中略）終わりはないって感じ」（Bmさん）で、入居当初から定期的に持ち上がってくる問題である。

共用空間の使い方をめぐっては、秋桜では月に1回開かれる定例会でそのルールや方法が話し合われる。秋桜の「話し合い」は、原則多数決をとらず、全員が対等に意見を述べ、全員が納得するまで熟議を重ねた上で意思決定が図られる。つまり、住宅の運営内容や方法を決めるにあたっては、定例会への居住者全員の参加が極めて重要となる。

とはいえ、定例会に参加しているのは、居住者組合に加入している居住者、すなわち大人のみである。子どもについては20歳になる時に本人が居住者組合¹¹⁾に加入するかどうかを決めることになっており¹²⁾、これは裏を返せば、定例会の場で子どもたちの意見が反映されにくいということでもある。

この問題が顕在化したのが、2階の共用廊下の一角の模様替えの時である。広さ5㎡ほどある同空間は、南側の壁の一面がガラス張りとなった日当たりの良い空間である。この場所は、もともと子どもたちが自由に遊べる「キッズ・スペース」として位置づけられ、子どもたちの間でも大人から干渉されにくい居心地の良い空間として好まれていた。しかしある日の定例会で共用空間全般の模様替えが提案され、共用廊下もまたその対象となった。それまで置かれていた子ども用の滑り台やおもちゃは、子どもたちが成長し遊ぶ頻度が下がっていたこともあり撤去され、代わりに大人でもくつろげる空間として本棚とソファが設置されたのである（Amさん）。

この決定は、子どもと大人とがともに快適に暮らすことを考える「キッズ・グループ」と呼ばれる、秋桜の活動グループのミーティングの場で大人から子どもたちに伝えられた。子どもたちからは何の相談もなく共用廊下を模様替えしたことに強い反発が起きた。その後、子どもたちの不満の声は、次の定例会の場で伝えられた。居住者組合も子どもの意見を聞くことなく意思決定したことに対して反省し、子どもたちに正式に謝罪するとともに、あらためて同空間が居住者全員の共用空間であることを双方で確認し、最終的に同空間の本棚に漫画を置くことで両者が和解した（Amさん）。

このように、秋桜では子どもと大人の関係が単に年齢を基準とした一方向的で序列的なものでは必ずしもなく、ともに暮らす居住者の一人として子どももまた発言権を持ち、時には大人と対等な形で意見を述べるのが可能な関係性を築いている。

5. 秋桜における子どもの育ち

では、秋桜において、子どもたちが家族以外の他者とも関わりながら暮らすことは、冒頭で示した子どもの育ちという点においてどのような意味を持つのだろうか。

5.1 子どもにとっての「遊び」

まず挙げられるのは「遊び」を通じた育ちである。子どもたちは遊びによって知性や感性や身体を発達させるだけでなく、他者との関わり方や関係の築き方・維持の仕方を学習する（藤本 2001）。さらに、子どもは遊びを通じた他者との相互作用の中で、自己や他者の役割を取得し自我を形成していく（Mead 1934=1975）。つまり、子どもにとって遊ぶことは自らの育ちにおいてなくてはならない活動なのである。

しかし、現代社会では子どもが遊ぶこと自体が難しくなっている。厚生労働省が2015年に行った『第6回21世紀出生児縦断調査』によると、5歳児の子どもを持つ親のうち、34.4%が自分の子どもには「近所に友だちがいない」と回答している。さらにそのうち、49.5%が「ひとりでよく遊ぶ」と回答しており、子どもたちの身近に遊び相手があまりいないことがうかがえる。細辻恵子は、現代社会では放課後や休日に子どもたちが集まって遊ぶことが減少したとし、その要因として、空き地の減少や道路の増加に伴う遊び場所の減少という空間的要因、習い事や塾通いで遊ぶ時間が減少してしまったという時間的要因、さらに時間的要因と関連して一緒に遊ぶ友だちが減少してしまったという仲間の要因を挙げている（細辻 2005:77）。特に週末については、家族単位での外出が遊び相手をみつけるのを難しくしていると、「マイホーム・レジャーが子どもどうしのヨコの結合を成立させにくくしている」と指摘する（細辻 2005: 80）。

秋桜でも各家族のライフスタイルは異なり、基本的には家族のプライベートな時間をベースに日常生活が送られている。しかし4.1.でみてきたように、秋桜ではコモンミールやイベントなど子どもたちにとって一定の遊び時間が確保されているだけでなく、コモンをはじめとする共用空間の存在、そして住宅内ですぐに会える遊び仲間が担保されており、子ども同士で遊ぶことそのものが比較的容易にできる環境にある。このことは、Emさんの「[[コレクティブの]良かったことは、何よりも子ども同士で常に遊べる環境にあったこと。それに尽きます。」といった語りからもみてとれる。

もちろん、子ども同士で喧嘩することもある。Acくんが幼い頃は「子どもが多い分、けんかも多かった」と話す。しかし翌日には「けろっとし」ていたと言い、子どもたちなりに人間関係を築いてきた。Amさんも「[子ども同士]まあもちろんケンカもしますし、争いごともありますけど、でもそれはそれでなんとなく自分たちで解決しつつ、大人の介入が必要な時は入ってということで、なんとか上手く回って」きたと述べる。

ここで重要なのは、こうして子どもたちが住宅内や住宅周辺で遊んでいる間、親たちは「あんまり実は詳しく知らなくて、ほったらかし」（Dfさん）にしており、子どもの日常の様子は他の居住者から伝え聞きしていることである。Dmさんも「基本的に家において。彼らには（中略）敷地から出ちゃ駄目だよっていうふうに伝えてて、（中略）ずっと一緒に外に出てついて回るっていうことはなく、時々声聞こえたら大丈夫かなと見るくらいです、ベランダから。」と話す。こうしたことが可能になるのは、秋桜では親が常に子どもたちの様子を見ていなくても、敷地内や住宅周辺であれば他の居住者の誰かが子どもたちを見かけているという安心感があるからである。居住者同士お互いを知っているため、危なければ直接子どもに注意したり叱ったりもしてくれ、何かあれば親に連絡してくれる。こうして子どもたちが遊んでいる間、親たちはコモンミールやミーティングなど自主運営の活動を他の居住者と一緒に従事したり、地域活動や趣味活動に積極的に参加したりしている。

こうした親子の物理的距離は、子どもから親への適度な心理的距離感にもつながっている。この点について、Amさんは次のように話す。

ママがいないとダメってことにはならなくて、わりとあっさり、出張も、いってらっしゃい、お土産買ってきてね、みたいな感じで。それはたぶん、ここに住んでいるから、あんまり寂しくないというか、寂しさもまぎれるというか。そういうのがあるのかもしれない。

Acくんはもともと「そんなにママ、ママ言わない」子どもではあったが、AmさんやAfさんが不在の時でも寂し

がることはないという。事実、東日本大震災でAcさんAmさんともに帰宅困難となった時も、当時Acくんは5歳だったが、「いつも知っている大人とまあ子どもがいたりとかして、(中略) 多少の不安はあったと思うんですけど、そんなにその寂しくてとか、普通に楽しくみんなでご飯食べて過ごしたみたいなんで。翌日帰ったら、あー、おかえりーみたいな感じ」(Amさん) だったという。

5.2 血縁を超えた互酬的ケア関係の創出

秋桜での子ども同士の関係は、単なる遊び仲間というだけにとどまらない。「[Acくんは] 一人っ子だけできょうだいみたいに育った」とAfさんが言うように、秋桜での子ども同士の関係性について親が語る時、しばしば「きょうだい」といった比喩が用いられていた。特にこの表現が使われる場面が、年長の子どもが年少の子どもを世話する時である。例えばCmさんは、Cc1ちゃんが2歳の頃、同じ秋桜に暮らす6歳上の女の子Iちゃんが「お姉ちゃん的な感じ」でCc1ちゃんの世話をよくしてくれたという。

[2人の間には] もともといい関わりがその中であって、お風呂に入ったりとか、お互いの家でなんかみんなでお風呂入るとかも結構やって、もともとそういう関係性は子どもの中であって。で、Cc1ちゃんもやっぱ、そのお姉ちゃんにはついてくとか、お風呂はすごい嫌だけど、その子が入ろうっていったら入るみたいな感じになって。

当時Cc1ちゃんは自我が芽生えてくるイヤイヤ期のため、Cmさんだけでは手に負えない時がたびたびあった。そんな時、Iちゃんは自らの役割を理解し、率先してCc1ちゃんの世話を引き受けてくれた。Iちゃんは「Cc1ちゃんは自分のことを好きで、自分のことだったら聞いてくれるっていうのはたぶんわかっていて」お風呂に誘ってくれたとCmさんは語る。このように、日常的な子ども同士の関わり合いは、子どもたちの間で相手の気持ちやニーズを汲み取り、それらに応答していく関係性を自然と創り上げていることがうかがえる。

こうした年長の子から年少の子への配慮はEc1くんとAcくんの間でも見られた。Emさんは次のように話す。

実はハウスに来て[Ec1くんの]一番最初の友達ってAcくんだったんですよ。Acくんて凄く優しいからEc1ちゃんがまだまだシャイで誰とも話せないときにAcくんが一番積極的にEc1ちゃんに話しかけてくれたんですよ、子どもの中では。一緒にちょっと遊んだり、うちで一緒にお風呂入ったりそういう経験もしてます。最初の何ヵ月かは凄くAcくんのおかげでした。

当時3歳だったEc1くんは入居当初、コレクティブの生活になかなか馴染むことができなかった。AcくんはEc1くんより10歳ほど年齢が上だが、AcくんはEc1くんの気持ちを察し、Ec1くんが秋桜の生活に慣れるよう気にかけてくれた。

ここで興味深いのは、Acくん自身もそうした経験を経てきたことである。3歳の時に入居したAcくんは、幼い頃から秋桜の大人に「かわいがって」(Afさん) もらいながら育ってきた。その過程でAcくんは、「子どもをこうやって育てたらいいんだとか、子どもがけがしないようにこうすればいいんだ」など「子どもをどうやって扱えばいいんだっていうのは、よく分か」ったという。世話を受けながらも「工夫してる親を見て」「自分にも役立つ」「後々学べる」ことも多々あったと話す。

細辻は、社会化のメカニズムの議論の中で、ある人が役割を遂行する際、周囲からの役割期待を知覚し(役割知覚)、その役割をまずは自認してから(役割自認)、役割行動が起きると説明する。その際、役割知覚から役割自認の過程において「モデリング(社会的学習)」と呼ばれる、「他者の行動を観察することによって自らの行動を形成する」過程が重要だとする。さらにモデリングは、「模倣と違って、修正された、あるいはまったく新しいパターンが創出

される余地」(細辻 2005: 165)が残されており、状況に応じて自ら柔軟な対応を生み出す可能性を含んでいると指摘する。Acくんにおいても、幼い頃から秋桜の大人たちにケアされる経験を通じ、自身が受けてきたケアを今度は年下の子に互酬的に行うだけでなく、他者のケアの観察を通じて状況に応じてAcくん自らが適切なケアのあり方を考え対応してきたことがうかがえる。

5.3 親ではない大人の存在

秋桜における居住を通じた人間関係には、親子という垂直的な関係でもなく、友人という水平的な関係でもない、もう一つの関係が構築されている。それは居住者たちの間で「ななめの関係」と呼ばれるもので、親ではない大人と子どもとの関係を意味する。

4.2. でみてきたように、秋桜では共に暮らす大人とも遊ぶ機会が豊富にある。子どもたちはそうした大人から、友だちや親からだけでは得られない知識や技能を習得できる。例えばCmさんはCc1ちゃんが大人の居住者と遊ぶ様子について以下のように述べる。

大人が得意なこととかいろいろあって、まあ細かいビーズがすごい上手な人がいて、その人に教えてもらって作ったり、折り紙教えてもらったとか [Cc1 ちゃん] 言ったりとか、(中略) [コモン] ミールのデザートを作った時にも、ちょっと遊びながら一緒にやろうよみたいに [Cc1 ちゃん] を誘ってくれて。(中略) で、なんとかさんはこんなこともできるみたいなことを結構言うんですね。(中略) だから、結構まあ見て吸収じゃないけど、それぞれ色んなことをやってるなあっていうのがたぶんほんやりわかってるみたいで、ずばりいまなんか、具体的にああなりたいとか、そういうのはないけど、でもたぶん、親だけを見てるとわかんないっていうか、知らないこととかも見てるんじゃないかなあって思ってるんですけど。

秋桜の居住者には自分の趣味や特技を持つ人も多く、暮らしの中でそれらが発揮される場面がしばしばある。例えば、料理好きな人はコモンミールでエスニック料理を作ったり、植栽に詳しい人は、庭の手入れをする際に草刈りや草木の手入れの仕方について手ほどきをするなどである。子どもたちもこうした場に遊び感覚で参加することが多々あり、その経験を通じて多様な価値や技能を身につけ、視野を広げたり、選択肢や可能性を広げたりすることができるのではないだろうか。

親以外の大人の存在は、子どもにとって自身を肯定的に受け止めてくれる貴重な存在である。亀山佳明は、こうした存在を「社会的オジ」(亀山 2001: 63)と呼び、子どもたちの社会化の準拠者としてその重要性を指摘する。社会的オジとは、地縁や血縁に関係なく、親子間で生じる対立や衝突を調整したり、回避させたりする役割を担う存在のことを言い(亀山 2001: 63)、社会的オジとの相互作用を通じて子どもは積極的にその人の価値観や行動様式を学習していくという(亀山 2001: 56)。4.2でもみてきたAcくんとHさんにおいても、AcくんはHさんのことを「親戚のおじちゃん」として慕い、親と喧嘩した時には話を聞いてもらうこともあった(Acくん)。特に進路の相談については、親よりもHさんの方が話が合うと言い、HさんはAcくんのよき理解者となっている。

また、こうした子どもと社会的オジの関係では「子どもの側においてコミュニケーションの『二重学習』の習得を可能とする」(亀山 2001: 62)。Amさんも、AcくんがHさんと話をする時について「あんなに親には反抗するくせに、(中略) [Hさんの言うことには] 素直に聞くと話しており、Acくん自らが関係に応じた相互作用のパターンを身につけていることがわかる。

近年、学校でもなく家族でもない「子どもの居場所」の重要性が指摘されている。ここでの「居場所」とは、一定の物理的空間というよりは、安心や安らぎ、あるいは「他者の受容とか承認」という意味合いで用いられている(住田 2014: 3)。多世代からなる秋桜では、子どもたちの周囲に「ちょっと若いお兄ちゃんみたいな感覚でいられる大人の人」が何人もおり、同年代だけで構成される「学校とかとは全然違う人たちとのつながり」(Afさん)が生まれや

すい。学校空間という同年代の閉じた人間関係ではなく、また心理的に距離が近すぎる親でもない、気軽に話や相談ができる第三者が身近にいることは、子どもにとって心強い味方になると考えられる。

5.4 コレクティブというコミュニティの一員として暮らすこと

では最後に、子どもにとって、コレクティブというコミュニティの一員として暮らすことはどのような意味をもつのだろうか。

秋桜の子どもたちは自らの意思で秋桜に入居してきたわけではないが、居住空間や生活の一部を他の居住者と協同化している以上、居住者の一人として自主運営に関わらざるを得ないときがある。例えば、4.3 でみたように、共用空間の使い方について、居住者として大人に対しても自身の意見を述べ、調整するといったことである。

共用廊下の模様替えの一件後、キッズ・グループの中に「子ども会議」と呼ばれる、小学生以上の子ども同士で意見交換を行う場が設けられた。これはBmさんによって提案されたもので、その経緯について次のように話す。

当時子どもたちもいろいろ言いたい年ごろだったんで、なんかいろいろ言うんですけど。で、なんか不満みたいなのがちょっとあったりして。なんかその例えば定例会でこう決まったからこうなんだ、とか、ここではこういう暮らしになるってことになってるんからこうなんだ、っていう言い方をしても本人たちは参加していないので、結局大人に決められたことに従うみたいな思考回路になってて、ちょっと反発したんです。そんなの誰が決めたの、みたいな、たとえば廊下で遊ぶとか。そういうの見てて、せっかく暮らしてるのに、なんか決められたことに従うみたいなのは、ちょっともったいない、ていうか。

子ども会議では、定例会で議論された子どもにまつわるルールや問題を子どもたちに伝え、それらについて子どもたち自身にも考えてもらい意見交換をする機会が設けられている。その時の様子についてAmさんは次のように話す。

なんかね、おもしろいですよ、まだ全然ちっちゃい頃やったときは、文字もたいして書けないときとかに、(中略)急にノート取りに行行って戻ってきて、議事録とってる風にこう書いてるんですけど、なんて書いたんだろう、みたいなことがあるぐらい(笑)。なんとなく、定例会毎月やってるのを子どももなんとなく見てるから、参加はしてなくても感じてはいるわけじゃないですか、そんなのあるから、こうちゃんと話をしたり、意見を言ったり、記録したり、っていうのやるんですよ。

秋桜では小学生以上の子どもの減少により、子ども会議は2年間ほど中断していたが、久しぶりに開かれた子ども会議では、4名の子どもたちが参加し、大人がサポート役となって、「ハウスでやりたいこと」や「ハウスでの不満・言いたいこと」などを中心に話し合われた。この時は、Amさんが言うような、活発な議論が行われたわけではないが、Bc2くんから「レゴ以外のおもちゃが欲しい」と提案が出されると、それについて子どもたちが意見を出し合い、そこでの意見がまた定例会へと報告されるといったことが行われた(2020/1/19)。他にも、子ども会議では、子どもたちで地域のフリーマーケットへの出店企画をしたり、子どもたちが中心となってコモンミールを作る「キッズミール」の開催を企画するなどもしている。こうして、子どもたちもコレクティブというコミュニティの一員として参加することで、自然と他者と協調や交渉を図りながら、暮らしを共に創りあげていく術を身につけることができるのではないだろうか¹³⁾。

6. おわりに

以上、本稿では、秋桜を事例に、子どもが親以外の他者とも共住するコレクティブという住まい方において、他者

とどのように関わり自らの育ちにとってどのような意味を持つのか考察してきた。この点について、本研究から以下の3点において示唆が得られた。

1点目は、子どもの自律的な育ちである。これまでみてきたように、秋桜の子どもたちは、子ども同士や大人たちとも積極的に人間関係を築き、時には状況に応じて年少の子をケアしたり、大人たちと共用空間の使い方を交渉したりするなど、親の関与や干渉が少ない中で、自らの意思や判断を基に他者とも協調しながら行動する自律的な育ちをみせてきた。これは、秋桜では安全な居住空間や信頼できる他者が存在しているためで、子どもは親以外の人たちとの関わりが増える分、親との関わりが相対的に小さくなり、その結果、子どもたちは親の直接的な保護や監督が少ない中でも育つことが可能になったと考えられる。

2点目は、親からの自立した育ちである。子どもたちは幼い頃から一個人として様々な他者と関わり、一種の社会経験が積まれてきたと言える。加えて、一般的にコレクティブの住戸は設計上狭いため、子ども1人1人が個室を持つことに限界がある。こうした居住環境は、子どもが親からの独り立ちを促すことにもつながるのではないだろうか。事実、Acくんからは高校卒業後は秋桜以外のコレクティブに住んでみたいという意思が聞かれたほか、Bc1くんには、中学3年生の時に自らの意思で親元を離れて寮で暮らし始め、高校卒業後も学生寮で暮らすなど、思春期の子どもたちの間では早期に親からの自立意識がみとれる。宮本らは、離家経験や親との別居は、子どもの精神的・経済的自立を促進する上で重要な要素だと指摘する（宮本ほか1998：64）。

尚、ここであらためて強調しておきたいのは、従来の社会化研究では、子どもは親から一方的に社会化される対象としてみなされがちであったが、本稿はコレクティブを題材とすることで、子どもの育ちにおける自律や自立といった側面を実証的に掘り下げてとらえることができたと考える。

最後は、コレクティブという住まい方の意義である。コレクティブの一つである秋桜では、共用空間や生活の一部を居住者間で協同化することで、子どもも自然と親以外の他者と関わる機会がもたれてきた。多様な他者と関わることで、子どもは様々な背景を持つ他者を理解する経験が積まれるほか、他者との持続的な人間関係の築き方を親から教えられるのではなく、自らの力で身に付けていくことが可能となる。こうしたことは、プライバシーを重視した従来の家族単位の住まいにはない、新たな暮らし方の可能性を示している。

子どもの育ちを支える上で、冒頭で示した「家庭教育」を重視する潮流は、現代において親たちの間でも広く受け入れられつつあり、特に育児の主な担い手である母親は、子どもに様々な教育や社会経験の機会を提供するため、自らの時間や労力を可能な限り割いて子どものために尽力している。しかしその一方で、母親の多くが教育の内容や方法において葛藤や負担を抱えているだけでなく、子どももまた母親からの過度な期待や次々と用意される諸経験がストレスになり、結果、バーンアウトしてしまう危険性が指摘されている（本田2008）。つまり、「家庭教育」を重視する方向性は、それが本来目指している「子どもの育ち」にとって決して有効な方策とは言えないのである。

こうした現状に対し、本稿でみてきたコレクティブは、居住という日常的な営みの中で、親があらゆる面で責任を負わなくとも、子どもたちは親以外の他者とも日々関わりながら、社会性や自立心を自然と身に付けていく環境が備わっていたと言える。これはまさに子どもの育ちを支える「場」を提供する1つの方途になりうるものだと考える。

ただし、日本においてコレクティブは数としてまだまだ少ないのが現状である¹⁴⁾。その理由として、特に都市部では土地代や建築費の高さが挙げられる。土地や建物に関する公的支援などコレクティブが普及しやすいインフラ整備を進め、コレクティブを希望する人が誰でも暮らすことができる環境整備が望まれる。

謝辞

調査実施にあたっては、秋桜の居住者の皆様及び CHC のスタッフをはじめ、ご協力頂いたすべての方々にご場を借りて心より御礼申し上げます。

付記

本稿は、JSPS 科研費（課題番号：16J40007、19K23263）による研究成果である。

[注]

- 1) 脱青年期を遅らせる他の要因として、日本社会では高額な住居費や教育費のため経済的に親に依存せざるを得ないという社会経済的要因もある（宮本ほか 1998）。
- 2) シェアには、マンションなどの一区画（フラット）をシェアする「フラットシェア」と、一軒家をシェアする「ハウスシェア」がある（久保田 2009: 35）。
- 3) コレクティブの歴史が古いスウェーデンでは、主に 1930 年代半ばから 1950 年代半ばにかけて、使用人が共用空間を使って居住者の食事作りや洗濯を集約的に行うコレクティブが展開された（Vestbro 1997）。
- 4) 「秋桜」という名称は倫理的な面を配慮し仮称である。調査実施にあたっては、調査開始時に筆者が所属していた大阪大学大学院人間科学研究科の調査倫理委員会から承認を得た後、秋桜の居住者組合及びインタビュー対象者から調査同意を得た。
- 5) CHC は 2000 年 10 月、スウェーデンを起源とする自主運営型コレクティブの普及活動・事業化・運営支援を目的に設立された（<https://chc.or.jp/outline.html>、アクセス日 2019 年 8 月 20 日）。
- 6) 子育て世帯が主に暮らすのは 1LDK（41.25㎡または 48.91㎡）と 2LDK（48.7㎡）の住戸である。
- 7) 2020 年 4 月～2021 年 12 月の観察については、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、オンラインでの定例会に毎月参加した。
- 8) 2020 年 4 月～2021 年 9 月のインタビュー調査については、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、オンラインで実施した。
- 9) Ef・Em さん家族については、Ec1 くんは親と一緒に入居、Ec2 ちゃんは秋桜入居後に誕生した。
- 10) 対象者がコレクティブのことを知ったのは、知人や雑誌記事、CHC の別のプロジェクトを通じてである。
- 11) 秋桜の 2021 年度の居住者組合は、役員（代表、副代表、会計監査、書記）、運営委員（会計係、会員係、CHC 対応&広報係、見学対応係、地域・大家対応係、建物係、みどり対応係）、活動グループ（ミール、備品管理、ランドリー、当番管理・掃除、ワークショップ、キッズ、ペット）、おたのしみグループ（防災、セーフティネット、イベント・思い出づくり、キャンプ、やってみなはれ、スーパー、保存食を楽しむ）からなる。居住者は 1 つの役員または係、および 2 つの活動グループへの参加が求められる。尚、組合費として、入居時に出資金（大人 1 人につき 25 万円）を拠出するほか（退去時返却）、家賃とは別に毎月組合費（金額は年度によって異なるが、2021 年度は、大人単身世帯の場合 1 人あたり 9,900 円、大人 2 人の世帯の場合、2 人で 14,600 円、子どもは 1 人につき 500 円）の支払いがある。組合費は係やグループの活動費や共用空間の備品購入費・光熱費などにあてられる。
- 12) 2021 年 12 月 1 日時点で、居住者組合に加入した子どもはいない。
- 13) 同様の活動として自治会を中心とした子ども会が挙げられるが、秋桜がある地区には自治会がない。
- 14) CHC がこれまで携わってきたコレクティブの事業は全部で 6 事業である（<https://chc.or.jp/chcproject/index.html>、アクセス日 2021 年 12 月 30 日）。

[参考文献]

- Coffey, Amanda, 2006, "Socialisation," John Scott eds., *Sociology: The Key Concepts*, New York: Routledge, 164-167. (= 青木千帆子 訳, 2021, 「社会化」白石真生・栃澤健史・内海博文監訳『キーコンセプト社会学』ミネルヴァ書房, 188-191.)
- 藤本浩之輔, 2001, 『子どもの育ちを考える——遊び・自然・文化』久山社。
- 平山洋介, 2020, 『マイホームの彼方に——住宅政策の戦後史をどう読むか』筑摩書房。
- 本田由紀, 2008, 『「家庭教育」の隘路——子育てに強迫される母親たち』勁草書房。
- 細辻恵子, 2005, 『揺らぐ社会の女性と子ども——文化社会学的考察』世界思想社。

- 稲見直子, 2020, 「コレクティブハウジング居住を通じた親の社会化とその要件——コレクティブハウス秋桜を事例として」『年報人間科学』41: 1-17.
- 和泉広恵, 2013, 「子どもの社会化」野々山久也編『論点ハンドブック家族社会学』世界思想社.
- 亀山佳明, 2001, 『子どもと悪の人間学——子どもの再発見のために』以文社.
- 家庭教育支援の推進に関する検討委員会, 2012, 『つながりが創る豊かな家庭教育～親子が元気になる家庭教育支援を目指して～』.
- 厚生労働省, 2015, 『第6回21世紀出生児縦断調査結果の概況』.
- 小谷部育子, 1997, 『コレクティブハウジングの勧め』丸善株式会社.
- 久保田裕之, 2009, 『他人と暮らす若者たち』集英社新書.
- 工藤保則, 「子どもと遊び——子どもはなぜ集団で遊ぶのか」小川伸彦・山泰幸編『現代文化の社会学入門——テーマと出会う, 問いを深める』ミネルヴァ書房.
- Mead, George H., 1934, *Mind, Self, and Society*, The University of Chicago Press. (= 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳, 1975, 『精神・自我・社会(現代社会学大系第10巻)』青木書店.)
- 宮本みち子・岩上真珠・山田昌弘, 1998, 『未婚化社会の親子関係——お金と愛情にみる家族のゆくえ』有斐閣選書.
- 西川祐子, 2004, 『住まいと家族をめぐる物語——男の家、女の家、性別のない部屋』集英社新書.
- 落合恵美子, 2019, 『21世紀家族へ〔第4版〕——家族の戦後体制の見かた・超えかた』ゆうひかく選書.
- Parsons, Talcott and Robert F. Bales, 1956, *Family: Socialization and Interaction Process*, Routledge and Kegan Paul (= 橋爪貞雄・溝口謙三・高木正太郎・武藤孝典・山村賢明訳, 2006, 『家族——核家族と子どもの社会化』黎明書房.)
- 櫻井典子・小谷部育子・大橋寿美子・岡崎愛子, 2012, 「コレクティブハウジングの子育ち・子育て環境としての価値の研究(その1): スウェーデンと日本のコレクティブハウス事例にみる子育ち・子育て環境」『日本女子大学大学院紀要家政学研究科・人間生活学研究科』16: 145-156.
- 佐藤カツコ, 1970, 「家族における子どもの社会化に関する一考察——バールズの相互作用分析による親子関係の分析」『教育社会学研究』25: 146-160.
- 住田正樹, 2014, 『子ども社会学の現在——いじめ・問題行動・育児不安の構造』九州大学出版会.
- Vestbro, Dick U., 1997, "Collective Housing in Scandinavia: How feminism Revised a Modernist Experiment," *Journal of Architectural and Planning Research*, 14(4): 329-343.

いなみ なおこ 1974年生まれ 神戸松蔭女子学院大学人間科学部都市生活学科専任講師

主な論文

「コレクティブハウジング居住を通じた親の社会化とその要件——コレクティブハウス秋桜を事例として」『年報人間科学』41号. 「高齢者によるコレクティブハウジングの可能性—ひょうご復興コレクティブハウジングの事例から—」『ソシオロジ』53号.